

犯罪被害者等施策講演会（第14回）

日時：令和6年3月14日（木）14時～15時30分

場所：中央合同庁舎2号館地下2階大会議室

演題：「私にとって終わりはないのです」

講師：伊藤 秀子 氏

皆様、こんにちは。ただいま紹介していただきました伊藤秀子と申します。今日は私が遭遇した出来事を皆様に聞いていただきますが、東北なまりの言葉でお聞き苦しい点多々あると思いますが、よろしくお願ひします。

話をするに当たり、事件の概要に触れたいと思います。私の主人と長男は、平成18年5月7日のゴールデンウィークの最終日に無念の死を遂げました。深夜自宅に男が忍び込み、眠りについていた私たち家族を突然、刃渡り70センチの刀で数十か所も切りつけ、尊い2人の命を奪ったのです。その凄惨な事件は山形飯豊町一家殺傷事件と名づけられ、県内の事件で初めて死刑判決が出るかどうか、また、犯行動機が何一つ立証されず、少年期の遊びの中での出来事とされたため、大々的に報道された事件でした。

私が生まれ育ったふるさとは、今、話をしたとおり、山形県です。県の中心部、山形市から南へ約30キロ離れた小さな田舎町でした。2つの町を挟み嫁いだ先は畑や田に囲まれた自然豊かな町で、人口7,000人にも満たない、のどかな町でした。自宅の前は山の麓の大きな溜め池から流れてくる水が流れており、田に引く水路の小さな溜め池にはドジョウや小魚が泳いでおり、近所のこどもたちは木の枝にミミズをつけた糸を垂らし、小魚が釣れたときの歓声はひときわ賑やかで、得意気な顔をして遊んでいた光景が目に浮かんできます。

私は結婚して2人の息子に恵まれました。幼い頃の2つ違いの息子たちは、春一番にタンポポやつくしんぼを見つけると、競ってほっぺを真っ赤にし、一目散に家に駆け込んできて、「お母さん、タンポポとつくしんぼ、取ってきたから、じっちゃさ、あげてけれ」、（私が）「よく見つけたね。じっちゃ、喜ぶね。ありがとう」と答えると、満面の笑みが見られました。私がいなくても、その季節になると、仏壇に供えてくれていました。春の香りを家に運んでくれた息子たちの優しさは、我が家の春一番の心温まる出来事でした。

2人とも成長し、中学生になり、スポーツが好きな2人の部活は陸上部に所属し、冬期間は競技スキーと充実した中学時代を過ごしていました。高校時代は、学校は違っていましたが、四季を問わず、陸上に勤しんでいました。2人とも県大会、東北大会、長男は全国大会に出場し、大会の会場では声をかけ合ったり、健闘を讃え合っていました。家族で応援に行き、声の限り応援したことが思い出されます。やがて成人した長男は、車関係の仕事に従事し、次男は警察官として勤務していました。2人とも結婚が決まり、子煩悩な

主人は、2人の成長を喜んでいました。

ところが、忘れもしない平成18年5月7日、予想もできない事件が起きたのです。事件当日のことは、今なお薄れることなく鮮明に覚えています。外はまだ暗い午前3時でした。風が吹いている様子もないのにガタガタしたガラス戸の音とともに、誰かが家の中を歩く気配を感じ、何気なく目にした部屋の入口の引き戸が開いており、仁王立ちに立っている人を見ました。その姿は人間とは思えず、まるで化け物のようでした。思わず、「いやーっ」と叫び声を上げました。部屋の中は豆電球がついていたので、その姿は、はっきり見えました。夜明け前にもかかわらず、その者はつなぎの作業着を着て、サングラスをかけ、軍手をし、手には凶器を持っていました。

顔が見えないほど前髪を長く伸ばし、髪を振り乱しながら、突如、私に襲いかかりました。私はとっさに身を守ろうと右手を上げて、「何もしないからやめてけろ」との叫び声も無視され、犯人はためらうことなく右手を容赦なく何度も切りつけ、右手の小指は切り落とされました。さらに、頭部、頸部から上腕にかけ、腹部と全身にわたり切りつけられました。頸部から上腕にかけての傷は深さ3センチで、約40センチメートルの長さの傷跡は今も消えずにくっきりと残っています。隙なく切りかかってくる犯人に対し、小指をすぐに捨てることはできませんでしたが、服で包み込みました。

後の裁判で知りましたが、刀は殺傷能力のある所持してはならないブラックニンジャソードという刀でした。利き手である右手は4回の手術を受けましたが、障害が残り、三十数年、看護師として働いてきた仕事を奪われ、人生を狂わせられました。

また、当時、主人は肺癌の術後で体力がまだ回復せず、疲れていたせいか、すぐには気づきませんでした。必死の思いで主人を動かし、ようやく気づいた夫は、「おまえは誰だ」と一言発しただけで、抵抗することもできず、声は途切れてしまいました。私は犯人が夫に襲いかかっている一寸の隙に110番しました。ところが、電話の向こうでは、私が話していることを信じてもらえていないような雰囲気でした。「本当だから、早く来て。本当だから、信じてください」と何度も繰り返し、話をしたのですが、これ以上説明している時間がないと思い、住所と世帯主である夫の名を伝え、電話を切りました。それほど、のどかな農村地帯で前代未聞の事件でした。誰もこのような事件が起きるとは予想もできなかったのです。その後、連休で自宅に帰り、2階で寝ていた長男が騒ぎに気づいて2階から下りてくると、待ち構えていたかのように犯人は刀を振り回し、襲いかかったのです。私は手助けしようと犯人の後ろに回り、夢中で髪の毛を引っ張りました。ボロボロに切られた右の利き手は使えず、左手は恐怖で震え、力が入りませんでした。それでも2、3本引き抜いて、この髪は後で証拠となるかもしれないと思い、しっかり握っていました。

今だから言えることですが、あのとき、何かで犯人の頭を叩いて脳震盪を起こさせていたら、長男は助かったのではなかったのかと今でも長男を助けることができなかったことに自責の念に駆られてしまう自分があります。また、犯人の髪の毛を引っ張ることができたのは、私自身、感覚が麻痺した状態であり、そのような動きができたのだと思います。

薄暗い家の中で、ガラス戸が倒れる音や足の踏み場がないほど粉々に飛び散ったガラスの破片、血の海となった畳、犯人と長男がもみ合う姿は筆舌に尽くしがたく、まさに生き地獄でした。襲われながら、長男の最後の言葉となった「お母さん、俺、大丈夫だから、早く逃げて。警察さ、警察さ電話かけてけろ」。

いつ、どんなときでも家族思いの長男の声でした。恐らく長男は警察官の弟に託した思いがあつてのことと私は思いました。既に警察に通報したことを口にする余裕はなく、犯人がまだ長男を襲撃している中、次男に連絡をとるため、携帯電話を取りに部屋に戻りました。布団の上に倒れている主人を見て、既に息を引き取っていることは誰の目から見ても一目瞭然でした。後ろ髪引かれる思いでしたが、心を鬼にして右手にさらに服を巻き付け、胸に抱えて、背中に冷たい血が流れるのを感じながら、助けを求めようと外に出ました。

このとき、まさか犯人が同じ地区の同じ隣組で、行き来のあつた家の長男とは分からず、犯人の家は道路に面しており、大声で叫んだら気づいてもらえるだろうと走り始めたものの、見通しがよいから犯人に気づかれ、私まで殺されたらと思い、自宅のほうに戻り、早足で見えにくい後ろ隣の家に向かいました。向かう途中、自宅のほうを振り向くと、何度も振り上げた刀を振り下ろす犯人の動きを見て、心臓がちぎれる思いでした。自宅からわずか10メートルぐらいしか離れていない距離でしたが、倒れそうになり、何度もしゃがみ、土砂降りの雨の中、それでも犯人の髪の毛だけはしっかり握っていました。

犯人に気づかれないように小声で隣人の名前を呼び、玄関の戸を叩き、早く開けてと心に叫びながら、ようやく開けてもらった玄関になりふり構わず、全身血まみれで、泥だらけの素足で家の中に入り、いきなり「110番と119番に電話をかけて」との声に隣人は驚いて、体が固まり動けず、私が再度電話をかけました。今度は信じてもらえるだろうと一瞬ほっとし、電話をかけ終わったときには、力を使い果たし、つかんでいた髪の毛は自然と手から落ちてしまいました。そのとき、長男が託したと思われた次男に「いきなりお父さんとお兄ちゃんが誰かに殺された。ばっちゃんは大丈夫だけど、私もひどい傷を負っている。110番したけど、まだ来ないから、千葉の警察からも電話をかけて」と、わらをもつかむ思いで頼みました。

このとき、次男は警視庁から千葉県警に出向し、成田空港の警備隊として仕事をしていました。今、考えると、状況も正確に把握できず、無理なお願いだったと思いますが、あのときは生きるか死ぬかの窮地に立たされ、考える余裕はありませんでした。意識がもうろうとしながらも、結婚式を目前に控えていた長男の婚約者や親戚の家にも電話をかけ、一方的に手短かに話をして電話を切りました。このとき、私の実家の母には、心配をかけてはならないという強い思いがあり、死ぬ前に最後の声は母に届けたいと思いましたが、結局、電話をかけることができませんでした。当時、一人暮らしの母は、テレビのニュースを見て、母の甥の車で病院に駆けつけてくれたことを後で知りました。

電話をかけた後、長男と義母のことが心配で、どうなっているのか、もし途中で自分が

殺されたとしても、2人を自分の目で確かめたい一心で、隣人に犯人が家のほうにいるか確認してもらおうと、「山のほうに逃げていったようだから大丈夫だ」と言ってくれた言葉に半信半疑の思いで、「本当にいないのか」と何度も何度も聞いて、隣人の背中にしがみつきのながら、1歩歩いては止まり、また1歩歩いては止まりを繰り返しながら、自宅にたどり着きました。

玄関先には顔や体の原形を失うほどめった刺しにされ、変わり果てた長男が雨に打たれ、倒れていました。周りには電話をかけた親戚の人や近隣の人たちがおり、中には、このとき、まだ誰も知り得ない犯人の父親もいました。余りにも悲惨な姿の我が子を目にし、皆、足がすくみ、誰1人近寄ることもできない様子で、ただ呆然と立ち尽くしていることに、既に刺殺された我が子が余りにも惨めで、かわいそうで仕方がありませんでした。重傷を負った自分自身を顧みず、我が子の体を包むように布団をかけ、顔に雨が当たらないように傘を差してあげるのがやっとでした。もう力が尽きた私は、話をするのもままならないほど体力も消耗している中、救急車が来たら1番に病院に搬送してもらえるようにと周囲にいる人たちにお願ひし、道路に面した何もない、冷たいコンクリートの上になだれ込むように横になり、救急車を待ちました。

ようやく救急車とパトカーが来たとき、時計の針は既に5時前でした。焦っていた気持ちが長時間待っていたように感じましたが、通報してから2時間もたっていました。こんな対応でいいのかと思いましたが、声に出す力もありませんでした。また、重傷である自分に気づいてもらえず、生きている私を1番に搬送してとの声も届かず、最後に搬送されてしまいました。大量の出血で失血状態となり、生きてるのが不思議であったというドクターの話を後で知りました。気丈に振る舞っていた自分でしたが、病院に向かう救急車の中で、生命の危機を感じ、残される次男に遺言と思えるような、「もし私が死んだら、次男の息子に立派な警察官になるようにと必ず伝えてください」と救急隊員に何度も願ひする反面、訳も分からないまま主人と長男の大事な家族の命を奪われ、自分自身も重傷を負ったことを伝える生き証人とならなければ、死んだ2人の魂が浮かばれないと自分自身を奮い立たせていました。

搬送された自分が勤めていた病院の救急室で2度の心肺停止状態になりました。体全体が気持ちよくスーッと力が抜けていくのを感じたとき、ああ、死んでいくのかなと思いました。死んでは駄目だと、ふと我に返ったとき、心臓マッサージをしてくれた医師やベッドサイドで見守ってくださった大勢の医師たちがいました。招集をかけられた全科の医師がそれぞれの分野で懸命に、的確に対応してくださったおかげで一命を取り留めることができました。

事件当日から余儀なくされた壮絶な4か月間の入院、治療から通院に変わる時期が来ました。事件現場となり血の海と化した自宅には、思い出がいっぱい詰まった家であっても、精神的にも物理的にも帰ることはできず、さらに運転できない状態では、交通手段もなく、通院は無理なことでした。

また、当時、93歳の義母は、事件前はいつも夕御飯の準備をして、私の帰りを待っていてくれた元気な義母でしたが、一瞬にして息子と孫を失うというつらい悲しみをさせてしまった義母と2人での生活は困難であることは認識していました。気持ちだけが焦り、不安な日々が続く中、次男から、「ぼっちゃんは、おばちゃん夫婦が一生面倒見ることに話が進んだから、お母さんは何もしないでいいから東京で一緒に暮らそう」と言って手紙を添えてくれました。次男は愚痴1つこぼすことなく、私を支えてくれました。嫁いでからずっと一緒に生活し、2人の息子の子育ても手伝ってくれた義母を残して上京するなんて自分にはできない。本当に悩み、苦しみました。しかし、どうすることもできない現実に上京せざるを得ませんでした。

大事な家族2人の命を奪われ、さらに残された家族が離ればなれに生活をしなければならぬ理不尽なことに、あの忌まわしい事件があったからと考えると、犯人に対する憎しみが一層強くなる思いでした。そんな中、上京することを知った当時の山形県警本部の被害者支援室長様が、私が上京する前に検察庁、被害者支援都民センターに直接足を運んでくださり、支援の輪をつないでくださったのです。当時は心に余裕もなく、都民センターについて理解できませんでしたが、遠く離れた私に上京後の住まいのこと、医療機関の紹介、職場に関することなど親身に相談に乗ってもらい、情報を提供してくださいました。不安で心配ばかりしていた私にとって、本当にありがたいことでした。退院し、1泊だけ親戚の家に泊まり、翌日、親戚の人に付き添ってもらい、上京しました。

車窓から見える変わりゆく景色を目にしながら、手の痛みと複雑な思いが交錯し、涙がとめどなく流れてきました。住まいとなる住居の最寄りの駅に次男と、花嫁衣装に袖を通してあげることができなかつたお嫁さんが出迎えてくれました。一変した東京では、家族なしでは生活ができませんでした。通院時、混雑する駅で乗車することができなかつたり、後ろから歩いてくる人の靴の音がまるで犯人がついてくるような、あり得ないことでも常に恐怖心は消えず、緊張の日々を過ごしていました。

上京後、都民センターでは定期的に面談していただき、つらい気持ちを受け止めてもらい、その時々ニーズに対応していただきました。裁判前には裁判について詳しく丁寧に説明していただき、裁判中、加害者側の真実でない自分たちに利益をもたらすような言動に多少耐えることができたように思います。さらに、都民センターと並行して当時の住居地となった、杉並区役所の犯罪被害者支援室の担当職員の方には、役所での必要な書類の手続を手伝ってもらったり、第1審では検事との窓口となっただき、安心して受け止めることができました。

また、上京したことで、日本で指折りに数えられるメンタル面での専門の医師に、当時、国の研究機関で治療を受けられたこと、さらに都民センターから関係機関との連絡を図ってもらうことで、多面にわたり、多くの方に支援をいただきました。高裁に入ってから、地域を超えて宮城県の支援センターの方に公判時は欠かさず法廷の場に同席していただきました。東京から向かう私たちより早く裁判所の玄関で待っていてくださり、「大変だ

ったね、御苦労さま」と声をかけてくださり、細やかな気遣いがありがたく、生涯忘れることはありません。また、死んだ長男の友人も冬の悪天候の中、高裁が終結するまで法廷の場に入ることができなくとも、その日の裁判が終わるまで待機して、次男に寄り添ってくださいました。

私は恵まれた環境の中で多くの人に支えてもらっていました。日本全国で同じように支援を受けられることを私は願っています。

このように、人の温かさに触れた反面、マスコミによる2次被害では、世の中の全ての人が敵であるかのように思えてしまう自分がいました。当時、長男の友人が山形から毎日のようにファクスで送ってくれた新聞の記事の内容は、加害者側の言い分だと分かるような内容で、胸に突き刺さる思いは今でも消えることはありません。

都民センターの面談時、マスコミについて話をしてくださり、マスコミに対して被害者、加害者、中立であるべきことを、弁護士の先生を通して申出してもらいましたが、変化はなかったように思います。事件のことだけでなく、2次被害を受けたことは、私にとって耐えがたく、あのとき、私も2人についていけばよかった、そんな思いにさせられました。

刑事裁判については、犯行動機について何1つ証拠もなく、立証されないまま、加害者側の一方的な言い分や供述で展開されていると思えた裁判。公判が重なるごとに話の内容が膨張し、あり得ないことでも、その現場をまるで目撃したかのように話をする加害者側の弁護士の先生の言動に悔しくて、声を発しようとする自分。同行してくれた都民センター、杉並区役所の人になだめられ、何もできませんでした。

死人に口なしで、反論1つできず、この世から去ってしまった2人を思うと、今でも胸が痛みます。心の傷は消えることはありません。加害者側の弁護士は、当番弁護士でなく、名乗り出た弁護士でした。自分たちが描いたストーリーに従って進行され、あれよあれよという間に判決が出てしまったと思います。加害者が国で守られ、被害者の人権は無視されたような裁判でした。判決は第1審、2審とも死刑求刑を回避し、無期懲役でした。私たち遺族にとって、最後に唯一残された最高裁への上告も許されず、2人の命を奪った加害者側に許された今の司法には到底納得などできませんでした。判決後の検事との話し合いの場で、何度も上告してほしいと懇願しましたが、検事は判決文に違法がなければ、上告はできないという一言だけで、深々と何度も頭を下げるだけでした。

私はたとえ最高裁での判決が1審、2審と変わらないとしても、事件現場で極限状態まで恐怖との戦いを強いられ、あのような無残な最後でこの世から他界した2人の無念の思いを伝えることが生き残った私の責務と肝に銘じていただけに、その責任を果たすことができず、18年過ぎようとする今でも悔いが残っています。あのとき、私が死んで、若いこれからの長男に生きてほしかった。親より先にこどもに先立たれたことは本当につらく悲しく、身を切られる思いでした。

現在も加害者は山形の刑務所で服役中です。今、加害者家族の住居となっているところからは、30分ぐらいで刑務所に行くことができます。面会も規定に従い、いつでも面会で

きる環境にいます。加害者の両親からは、我が子が重大な犯罪を起こしているながら、謝罪の言葉はありませんでした。証言台に立った両親は、裁判長の質問に対し、弁護士の先生から謝罪するなと止められていたからと答えていました。

事件前は普通にお付き合いしていた人とは、まるで別人のような両親でした。人間の心を失った人たちとしか見えませんでした。残された私たち遺族が2人の無念な思いと名誉回復のために何か形として残してあげたいとの思いで起こした民事裁判の判決は、数億数千万でしたが、18年がたとうとする今でもたった1万円の支払のみです。せめて月命日に線香代だけでもとの声にも応じることはありません。さらに、高裁で裁判長に損害賠償について聞かれたとき、加害者の両親は自分たちも支払っていくから、死刑にはしないでくださいとの言葉も、その場限りのものでした。家族がそろって慎ましく生活できたら、お金なんて要りません。皆様、これが現実です。私は加害者が出所したときのことを考えると、恐怖感を覚えます。誰が私たち家族を守ってくれるのでしょうか。私たち遺族には終わりはないのです。私にとって春はまだまだ重い季節です。

また、皆様に聞いていただきたいことがあります。私は裁判について知識もなく、浅かな考えであることは承知しておりますが、刑事裁判の判決後は忠実に刑が執行されますが、民事裁判では判決が出されても、それを実行されているか、誰も見届けてくれる人はいません。弁護士の先生を通して正式に依頼しても、損害賠償金は必ず支払ってもらえるとは限りません。特に殺人については補償がなく、泣き寝入りしている人がほとんどだと聞いたことがあります。加害者はお金がないから払えない。働けないから払えないと言えは許されるのでしょうか。納得などできないし、違和感を覚えます。

確かに服役中であれば支払することはできないのは当然かもしれませんが、しかし、人間の命を奪っているながら、こんな簡単に済まされていいのでしょうか。国の機関で加害者に代わり、一時補填する制度を作ってもらいたいと私は思います。また、民事裁判の判決後に10年過ぎて被害者からの損害賠償の再請求がなければ、権利が消滅してしまう。こんなことがあってはならないと思います。このことを知っている人はほとんどいません。この点を含め、国では、検討している話は聞いていますが、具体的なことは流れてきていません。民事裁判についてももっと国で関わってほしいと思います。

最後に皆様をお願いしたいことがあります。被害者はメンタル面で医師の診察を受けるだけでなく、相談で行政や警察署の窓口で足を運ぶことがあります。確かに心の傷は消えないかもしれませんが、話を聞いてもらい、寄り添ってもらうことで心が癒されることを知っていただきたいと思います。今、私は警視庁が推進している命の大切さを学ぶ教室というテーマで、東京都内の中高生をはじめ、大学生、行政の人たちに話を聞いていただいています。私自身が癒され、2人の供養につながると思っています。

また、まだ右手に必要なリハビリとして手編みや洋裁を習っています。上手ではありませんが、1つの作品が完成したときの小さな喜びに浸りつつ、日々過ごしています。

今日は皆様に私の拙い話を聞いていただいて、ありがとうございました。皆様、たった

1つの命を大事にしてください。家族を大事にしてください。本当にありがとうございました。